

青岸渡寺

青岸渡寺は仏教の天台宗のお寺です。青岸渡寺は那智山の一部で、33体の観音菩薩（慈悲の仏）像にお参りする西国三十三所巡礼の一番札所として特別な重要性を持っています。「西国」とは西の国々という意味で、この巡礼で参拝される社寺は全て、現在関西と呼ばれる地域とほぼ重なる圏内にあることを示しています。西国三十三所巡礼は、貴族や上皇の間でこの巡礼が人気を博した平安時代（794-1185）から行われてきました。

由緒

このお寺は、4世紀に存在したインド出身の行者、裸形の拝所を起源に持ちます。裸形は滝つぼで慈悲の仏である観音菩薩の金色像を発見し、それを祀るための庵を建てました。実際の寺院が建立されたのは、生佛という僧が裸形の金色の観音像より大きな木彫りの観音像を安置するためのお堂を建てた6世紀後半から7世紀初頭です。

社寺複合施設

1590年に建てられた現在の青岸渡寺本堂は、熊野那智大社と隣接しています。江戸時代（1603-1867）の終わりまで、青岸渡寺と熊野那智大社は那智山という一体の社寺複合施設を形成していました。この形態は、明治新政府が仏教と神道の厳格な分離を命じ、僧侶たちが那智山から追い出されたことで終わりを迎えました。

1874年、おそらくこの寺が西国三十三所第一番札所であったため、僧侶たちは空になったお堂を青岸渡寺という新たな寺として使う許可を得ました。この寺には現在の青岸渡寺という名前（文字通り「青岸へ渡る寺」の意味）がつけられました。

拡大と発展

青岸渡寺の伽藍は、その後の数十年の間に拡張・発展を遂げました。1933年に建てられた山門は、仏教の守護神である仁王と神社を守る動物である狛犬という珍しい組み合わせが特徴です。三重塔は1972年に建てられました。厳密には、この三重塔は再建されたものです。前身の姿は500年前に描かれた那智参詣曼荼羅に見ることができますが、この三重塔は1581年に焼失しました。

鯿口

青岸渡寺には、世界最大の鰐口（スリットゴングの一種で、文字通り「ワニの口」という意味）もあります。青岸渡寺の鰐口は幅 1.4 メートル、重量 450 キロです。この鰐口はお寺の本堂の入り口に吊るされています。

修験道の復興

近年、青岸渡寺は修験道の復興の中心地となっています。修験道は熊野に深く根ざした信仰ですが、仏教的な要素を含むため、熊野三山から仏教が追放されると、山伏と呼ばれる修験道の行者たちは冷遇されるようになりました。北方の山々に囲まれた高野山をはじめとする他の修験道の拠点の助けを借りて、青岸渡寺の副住職は修験道の伝統を再確立することができました。今日、儀式の時期になると、山伏たちはかつてのように山に入って修行をしています。